

浮遊する歴史

— 1990年代の天皇論 —

荏 部 直

概 要

天皇論という視角から見た場合、日本社会の1990年代は、その前代との変化が大きいものに比べて、そのあと、2000年以降との違いはあまりなく、90年代における特徴が、いまも持続していると言ってよい。

言論界においては、かたやナショナリズムの復活を声高に唱える声、そして他方ではそうした動向を警戒する議論が盛んで、天皇論も対立点の一つとなっている。だが論壇での議論の熱さに比べ、社会一般の皇室に対する感情は、むしろ希薄なものと言ってよく、そのことがかえって、ナショナリズムと政治意識との関係に、ある不安定性をもたらしているのである。

キーワード

1990年代、日本、政治思想、ナショナリズム、皇室制度

1. 「90年代」か「平成」か

1990年代の始まり、と書こうとして、はたと考えた。21世紀が始まったのは2001年1月1日と通常考えるが、かつて1989年4月にボンで開かれた、マルティン・ハイデガーの生誕百年を記念するシンポジウムのパーティーの席上、交わされたという会話が頭にうかぶ。1900年に生まれた哲学者、ハンス・ゲオルク・ガダマーを囲んで、話題がその高齢に及んだとき、19世紀生まれと言われたくない師の顔色を察した、弟子のオットー・ペゲラーは、「イタリアでは一四〇〇年はクアトロチェントに属するとされている」と、

さっそく話をひきとったのである¹⁾。

そうすると、1990年代とは、1990年から始まるのか、それとも1991年からなのか、いずれにせよ、思想の世界のように、変わり目が必ずしもはっきりしない社会現象を取り扱う場合には、それほど厳密に、1、2年のずれにこだわって、考察の対象範囲をくぎる必要はないだろう。

しかし、ここで問題とする日本の天皇論、あるいは天皇観については、1990年の少し前に、大きな事件が生じ、それが一つの画期をなしていることは、疑いえない。1988（昭和63）年9月の、昭和天皇の病状重篤の公表からはじまる、一連の「自粛」の広がり、翌年初頭の崩御と現天皇の即位が、メディアの報道と、知識人の論説、また一般庶民の関心を、一挙に天皇へと向けたのである²⁾。

だが、そのような一種の皇室論ブームに先だつ時期に、天皇と皇室に対する一般社会の意識がどのようなものであったかについては、続く大事件の記憶のおかげで、かえって回顧しにくくなっている。そうした、天皇の代替わりの直前に見られた意識のありようを伝えるものとして、日本史学者、網野善彦の小さな著書、『日本社会と天皇制』（1988年2月）がある。

網野はそのころ、神奈川大学短期大学部の教授として、多くは女性が占める学生たちに、どうやって自分の講義に興味をもたせるか、苦心していた。何しろ、「天皇に関連した問題」について話しても、「彼女らはほとんどなんの関心ももっておりません」。教室の空気は、「ただ、『いたほうがいいんじゃないの』という程度の感じ」で、講義に注意をむけようとはしない。だが、「あなた方はこんどの皇太子が新しく位についたら、もう一時代前の人になってしまうんだよ」と語りかけると、「ポカンとして」教師を見つめるようになる。それに続けて、「あなた方の時代、昭和時代は、そのときは一つ前の時代になる。もうたぶん決まっているのかもしれないけれども、新しい元号の時代こそ新時代なので、あなた方もたちまち旧時代の人間になるんだよ」と説明すれば、「多少びっくりしたような顔をして、こっちをみるようになる³⁾」。

ここに見られるのは、1959（昭和34）年に松下圭一が論文「大衆天皇制論」（『中央公論』同年4月号）で指摘したような、戦後社会における新しい皇室像が、広く定着したせいで、一般の意識では天皇の存在意義が問われることがなくなり、その結果、皇室のあり方に対する関心も、きわめて希薄になった状態である。当時の皇太子（現天皇）の婚約をめぐる「ミッチーブーム」に国民が沸くなか、松下は、天皇や皇族が、戦前のように尊厳

1) 谷嶋喬四郎「百歳の誕生日（上）——ハイデッカーとヒトラー」（『UP』202号、1989年8月）

2) そのようすは、たとえば、栗原彬ほか編『記録・天皇の死』（筑摩書房、1992年）に詳しい。

3) 網野善彦『日本社会と天皇制』（岩波書店・岩波ブックレット、1988年）3頁。

と神秘に満ちた「現御神」^{あきつみかみ}ではなく、「科学者家庭の団らん」を示す、親しみやすい「スター」として、国民の目の前に現われるようになったことを指摘した⁴⁾。

松下が説くような、戦前と戦後での、国民の天皇に対する意識の変化は、各種の世論調査でも、戦後はおおよそ、畏敬の念より「親しみ」を感じるとする回答が、多くを占めていることからもうかがえる。だが、松下の指摘からもさらに三十年近い時がすぎた昭和の末期には、天皇・皇后の訪米（1975年）と在位五十年、六十年の記念式典（1976、1986年）を除けば、華々しいイベントやニュースを欠き、大衆への話題提供に関して、皇室は一種の停滞状況にあった。その中で、天皇の存在は、ごく当たり前のものとして認容されてはいるが、強烈な魅力も反感も感じられず、ただ空気のようにそこにあると見なされるようになっていった。

こうした、昭和末期、とりわけ1980年代の、天皇をめぐる意識のありさまは、終戦直後の議論状況と比べると、対照がきわだっている。1945（昭和20）年10月の、占領軍総司令部による言論規制撤廃の指令（人権指令）と、それに伴って釈放された、徳田球一ら日本共産党の活動家による、「天皇制」打倒の宣言（「人民に訴ふ」）をきっかけに、翌年にかけて、皇室制度の存否をめぐる論争が、多くの知識人の間で交わされていた⁵⁾。

このとき、たとえば津田左右吉、和辻哲郎など、皇室制度の保持をとなえた論者たちが、これまで日本人が天皇を尊敬し、支えてきた歴史をふまえ、その伝統を今後も持続させるべきだという主張を論拠にしていたことは、すぐ想像されたとおりである。だが反面、「天皇制」を、国民の意識に根づよくのこる「封建的」性格の表われと見なし、その廃止を唱えた左翼の側も、その議論は、終わったばかりの戦争の開戦責任を追及するねらいと結びついていた。そうした側面に着目して眺めれば、史実を眺める際の射程距離や価値評価の軸は大きく異なるにせよ、国民の歴史の中に、天皇という存在を位置づけ、その今後のあり方を考える点では、皇室擁護派とも、実は共通している。同じような形で、多くの一般の人々も、国民の歴史の物語や、政治体制の激変を、みずからの人生と深くからみあったものとして、当時は強く実感していたことだろう。

しかし、終戦から長い年月がすぎ、大衆社会・消費社会が発展するなか、松下が言う「大衆天皇制」が定着する過程で、終戦直後にあった歴史感覚は、人々の意識の後景へと、しりぞいてゆく。さまざまな情報や商品が、つぎつぎに現われては消えてゆく世界のなかでは、現在というこの時点を歴史の大きな物語に結びつけるのは、難しくなってしまう。

4) 松下圭一『戦後政治の歴史と思想』（ちくま学芸文庫、1994年）61～93頁。

5) その概観として、『戦後日本思想大系1・戦後思想の出發』（日高六郎編、筑摩書房、1968年）、宮村治雄「戦後天皇制論の諸相——『自由』の内面化をめぐる」、『戦後日本 占領と戦後改革3・戦後思想と社会意識』、岩波書店、1995年、所収）がある。

むしろ、微細なモードの変化をくりかえす、この「現在」が、あたかもずっと続いており、今後も永久に続くかのような感覚。天皇の存在は希薄な影のようで、「昭和」の時代が永遠に続いてもおかしくないと感じられる。——網野が伝える逸話は、このようにして昭和の末期には、天皇のイメージが、歴史と切り離されるようになったことを、示しているのではないか。

1970年代後半から80年代にかけては、文化人類学の視角から展開された知識人の天皇論が、隆盛をみた。それは、歴史と切り離された、一般人の天皇観のあり方と、ちょうどみあっているように思われる。そうした天皇論の常用語は「王権」にほかならない。このような分析視角の潮流は、すでに60年代から、日本文学の研究者、西郷信綱が、論文「大嘗祭の構造」(1966～67年)などで、政治制度としての「王制」ではなく、儀礼や象徴がその構造を支える「王権」として、古代の天皇支配を論じたことにはじまっていた⁶⁾。

だが、「王権」として天皇支配を分析する視角を、多くの論者たちに広めたのは、日本語の著述では「天皇制の深層構造」(1976年)、そしてそれを収録した『知の遠近法』(岩波書店、1978年)以来の、文化人類学者、山口昌男の仕事である。そこでは、中心と周縁、聖と俗、トリックスターといった概念装置を縦横に用いて、「王権」を支える象徴体系を説明している。この理論によれば、たとえばアマテラスに対するスサノヲのような、世界観の負の要素を体現する「王子」の存在によって、中心たる「王」の聖性が高められる、相互補完の構造によって、「天皇制」はなりたつ⁷⁾。

ここで山口は、古代、中世、近世といった時代による変化を追跡する「通時態」の分析をしりぞけ、神話に見いだされる論理構造を「共時態」として解明することを通じて、すべての時代に共通する、「天皇制」の「深層構造」をとりだそうとした。時代による差異にとらわれず、また、異なる文化圏における「王権」の事例との比較をめざす点で、知識人の天皇論における、歴史との断絶と評価することができるだろう。こうした山口の視角を引き継ぎながら、文化人類学や社会学の視点から、「ゼロ記号」(F.ド・ソシュール)や「空虚な中心」(ロラン・バルト)といった記号学概念を用いて、「天皇制」を説明する議論は、とくに1980年代の言論界で、一世を風靡した観があった⁸⁾。

6) 西郷信綱『古事記研究』(未来社、1973年)115～118頁、山口昌男ほか『古典の詩学——山口昌男国文学対談集』(人文書院、1989年)48頁。

7) 山口昌男『天皇制の文化人類学』(岩波現代文庫、2000年)78～92頁。

II. 希薄化と不安

1989（昭和64・平成元）年、昭和天皇から現天皇への代替わりにもとない、世は「平成」の新時代を迎える。社会調査の結果を見ると、一般国民の天皇や皇室に関する意識は、代替わりをへて、松下圭一が「大衆天皇制論」で指摘した傾向を、さらに強めている。「あなたは天皇に対して、現在、どのような感じをもっていますか」という質問に対して、70年代、昭和天皇の時代には、「特に何とも感じていない」という回答が第一位を占め、第二位は「尊敬の念をもっている」だったのに対し、1993年・98年の調査では、「好感をもっている」という回答の割合が大幅にのび、2003年には無感情という回答を上まわっている⁹⁾。皇室報道の主役が、より若い世代の皇族に代わったために、親しみの感覚がさらに広まったことを、この数字は示している。

しかし、言論界や学界では、代替わりの直後から1990年代の前半にかけて、天皇論における歴史の復活とも言うべき現象が見られた。昭和天皇の崩御と元号の更新が、時代の切れ目の感覚をもたらし、他面では、大葬や大嘗祭の宗教的性格をめぐって激しい議論が展開したことで、知識人の天皇論のありさまは、いったん大きく変わったのである。

歴史の復活の第一の側面は、天皇と皇室の存在を歴史の中でとらえかえし、その存立をささえた権力作用の、通史における変遷をたどろうとする試みが、盛んになる形で現われた。たとえば代替わりの直後には、赤松俊輔ほか『天皇論を読む』（朝日選書、1989年）、赤坂憲雄ほか『もっと知りたいあなたのための天皇制・入門』（JICC出版局、1990年）、『別冊文藝：天皇制——歴史・王権・大嘗祭』（河出書房新社、1990年）など、さまざまな角度からの歴史研究による天皇論を集成し、戦後の研究史を概観するような、書物や雑誌特集が、続々と刊行された。

この現象は、表面上は、自粛ブームや大嘗祭の挙行に対する知識人の危機感の現われであった。だが現在からふりかえると、天皇の代替わりという時代の更新によって、人々が

8) 上野千鶴子『構造主義の冒険』（勁草書房、1985年）、猪瀬直樹『ミカドの肖像』（小学館、1986年）、赤坂憲雄『象徴天皇という物語』（筑摩書房、1990年）といった著作に、そうした分析視角が現われている。ただ、この潮流と並行して、天皇にまつわる神秘性・宗教性を正面から問題にした、吉本隆明（「天皇および天皇制について」1969年初出、『信』の構造 Part 3——吉本隆明全天皇制・宗教論集成』、春秋社、1989年、所収）や山折哲雄（『天皇の宗教的権威とは何か』、三一書房、1978年）の仕事があり、他方では、網野善彦（『無縁・公界・楽』、平凡社、1978年、『異形の王権』、平凡社、1986年）が、文化人類学の知見もとりこみながら「天皇制」の歴史を構成しなおそうとした。こうした動きは、あとで述べる天皇の「代替わり」直後の天皇論議にも、大きな影響を与えている。

9) NHK放送文化研究所編『現代日本人の意識構造』第6版（日本放送出版協会、2004年）130～134頁。

歴史の中で天皇と自分との関係を考えるようになった、意識のあり方と、深く通じあっていたように思える。アカデミズムにおいては、『室町の王権』（中公新書、1990年）にはじまる、今谷明の一連の研究や、『講座・前近代の天皇』全5巻（青木書店、1992～95年）が、天皇の地位を、それぞれの時代の政治権力における力関係の中でとらえる仕事を、90年代に展開していた。そうした動向は、『大正天皇』（朝日選書、2000年）いらいの原武史の仕事や、『岩波講座・天皇と王権を考える』全10巻（岩波書店、2002～2003年）にひきつがれる形で、現在も続いている。80年代の、「通時態」の視角を排除した構造分析が支配した、天皇論のありさまは、大きく変わったのである。

第二の側面は、主に保守派の論壇雑誌や新聞を舞台とする。政教分離の観点からする大嘗祭批判に対する、一種の反批判として、日本の宗教的「伝統」の要をなす祭祀の主宰者という天皇の性格を、積極的に意味づける動きが、小堀桂一郎、西部邁などの知識人によって、90年代前半には盛んに進められた。

もちろん、祭祀の主宰者としての天皇を強調する言説は、それ以前からも、葦津珍彦や大原康男など、神道学の系列に属する論者が唱えていたものである。先にふれた、津田左右吉や和辻哲郎の、終戦直後における皇室制度存続論は、昭和戦前期・戦中期の「日本精神」論や「皇道哲学」が、天皇の「神」としての性格と、それに対する崇拜を前面におしだしたのを批判し、むしろさまざまな信仰や信条と両立する寛容さを、天皇に対する尊崇の伝統に見いだすものであった¹⁰⁾。こうした天皇論は、神道派の尊皇論者からすれば、外来の神も含めたさまざまな神々が、天照大神を中心として「皇国」を守護し、神道の信仰を基盤にして日本の国家がなりたっている伝統からの逸脱ということになるだろう¹¹⁾。

しかし、大嘗祭をめぐる論戦は、宗教勢力としての神道界とは独立したナショナリストの知識人にも、皇室の宗教的伝統を、正面から説かせるに至った。西部邁はその好例である。西部は1980年代なかばの文章では、天皇が「神でないことを知りつつ神として見よう」と語り、その「超越者」性というフィクションを、ある種の“嘘の効用”として評価すると述べていた。しかし天皇の代替わりを経て、その議論の枠組は保ちながらも、「象徴天皇という超越の次元が生者の多数決などという世俗の次元によって決定されるはずはない」（「皇室を開き放しにしてはいけない」1989年）と、議論の重点を、その「神秘」性の強化の提言に向けることになった¹²⁾。90年代の言説で、こうした動向の代表格とな

10) 和辻哲郎「封建思想と神道の教義」（1946年1月初出、『和辻哲郎全集』第14巻、岩波書店、1962年、所収）、津田左右吉「建国の事情と万世一系の思想」（『世界』4号、1946年4月）、同「明治維新史の取扱ひについて」（同22号、1947年10月）。

11) 平泉澄『寒林史筆』（立花書房、1964年）193～200頁。なお平泉澄は、『明治の光輝』（日本学協会、1980年、317～319頁）で、和辻哲郎の『倫理学』中巻（1942年）が、近代国家における国民の義務としての「奉公」は、天皇個人に対する「忠」とは異なる다고説いたのに対して、きびしい批判を加えている。

ったのが、大嘗祭への国費支出と、靖国神社の国家祭祀としての位置づけを説く、坂本多加雄『象徴天皇制度と日本の来歴』（都市出版、1995年）である。

だが、天皇の代替わりののち、日本社会に進んでいったのは、むしろナショナリズム感情の希薄化であった。香山リカは、『ぶちナショナリズム症候群』（2002年）で、サッカーの国際試合で無邪気に日の丸の旗をうちふり、「屈託なく」日本が好きと口にする若者たちに、危険な傾向を見いだしている¹³⁾。しかし、それがたとえば試合の相手国チームに対する攻撃にむかわなかったことを見れば、むしろ文化と伝統を共有する一体感としてのナショナリズムの感情が、薄まった現われとも言えるのではないか。「国民」としてのアイデンティティが突出するのではなく、同じ友人、同じ家族といった集団への一体感とまったく同じ温度で、「同じ日本人」と感じているのである。したがって、それが皇室や自衛隊といった象徴への傾倒にむかうことは、少数の突発現象を除けば、あまりない。問題はむしろ、広く人間関係一般において、同質な「われわれ」を、仲間から日本全体まで伸縮自在な形で、漠然と想定してしまうような、他者感覚の摩滅であろう。

したがって、平成の世、90年代以降の日本社会に、ナショナリズムの復権を見だし危機感を口にする論者は数多いが、批判の対象を過大に見積もっている印象が、ぬぐいされない。歴史の復活の第一の側面として挙げた、歴史学者たちの動向は、多くの場合、「天皇制」を軸としたナショナリズムの復権に、警告を発するものである。終戦直後の「天皇制」批判が、全体戦争という、国民の歴史の中での大事件を念頭におき、健全な国民国家の再建という課題意識から、その病理を告発していたのと比べれば、ナショナリズムの立場を遠く離れていると言えるだろう。むしろ、近代日本への反省という形をとったナショナリズムすら、歴史研究者の間で消え去りつつあることじたい、ナショナリズム感情の希薄化が、さらに進んでいることを示している。

そして、第二の側面としての、保守派論壇の言説も、一般社会におけるナショナリズム感情の喪失に対する、苛立ちの表明という色彩を強く帯びている。90年代の後半から、その後にかけて、保守派の言論界を席捲し、論争を通じて「左」の論者たちもまきこんだのは、西尾幹二や坂本多加雄を中心とする、「新しい歴史教科書をつくる会」（1997年発足）の運動である。たとえば坂本は、戦後日本人の「歴史感覚」の衰弱を憂えるところから出発して、誇りをもった「われわれ」としての「国民」の過去を、新たに語りなおし、「天皇制度」の伝統を強調することになった¹⁴⁾。

12) 西部邁『幻像の保守へ』（文藝春秋、1985年）299頁、同『マスメディアを撃て』（PHP研究所、1991年）28～32頁。

13) 香山リカ『ぶちナショナリズム症候群——若者たちのニッポン主義』（中公新書ラクレ、2002年）28～29、35～36頁。

14) 坂本多加雄『問われる日本人の歴史感覚』（勁草書房、2001年）54～63、197～205頁。

だが、その運動を実際に担っている、比較的若い世代の参加者の間では、天皇や皇室に対する関心が驚くほど薄いことが、すでに指摘されている¹⁵⁾。実際、運動を大衆化するのに大きな役割を果たした漫画家、小林よしのりの代表作『新ゴーマニズム宣言スペシャル・戦争論』(幻冬舎、1998年)には、自国のために立派に戦った祖父たちに対する顕彰はあっても、天皇への忠誠心についての言及が、ほとんどない。

つまり、言説の表面上では、左右を問わず、歴史の中に天皇の存在を位置づけ、その歴史と現在との関係を解き明かそうとする試みが、90年代には盛んになった。その傾向は、2006年の現在に至るまで、続いていると言ってよい。しかし、その水面下、一般の意識においては、天皇と皇室の存在感は、すでに希薄なものになっているのである。皇族をめぐる感情も、かつての「ファミリー天皇制」(坂本孝治郎)から、皇族一人一人の活動へと、その関心の対象を移している¹⁶⁾。

1990年代に、皇室をめぐる開催されたイベントのうち、最大のもは、何と言っても、1999(平成11)年11月に皇居前広場で催された、天皇在位十年を祝う「国民祭典」であろう。その日、主催者発表では三万人がこの祭典に参加したと言われている。だが、そのようすを見た佐柄木俊郎(朝日新聞論説委員)によれば、参加者のうち、伝統回帰を志向し、「ちょうちんを揺らす『奉祝』一色の人々」と、人気アーティストのライブに惹かれてやってきた若者たちとの間には、何の接点もなく、さながら「国民分裂の象徴」のようなイベントだったという¹⁷⁾。

この国民祭典のようすは、さながら、90年代の天皇論が描き出す言説状況とも、重なりあっている。言説の表面では、歴史の中に天皇を位置づける議論が盛んに闘わされながら、その奥底では、歴史を通じての皇室との結びつきの意識は、希薄になり、あいまいな形のまま揺らいでいる。皇室に対するまったくの無関心から、突如として激しい一体化に至る心の動きが、そこから生まれてくることも、突発現象としてはあるだろう¹⁸⁾。そうした精神状況・議論状況の不安定さは、90年代が終わり、21世紀初頭に入って、強まっているようにも思える。

15) 小熊英二・上野陽子『〈癒し〉のナショナリズム——草の根保守運動の実証研究』(慶應義塾大学出版会、2003年)29~34頁。

16) 坂本孝治郎「新象徴天皇へのパフォーマンス」(『中央公論』106年1号、1991年1月)、芹沢俊介『皇室・家族論——日本はいまどこにいるのか』(洋泉社、1993年)25~29頁。家族としての天皇家ではなく、皇族の個人としての生き方に関心をあてる傾向は、最近の言論人による議論としては、香山リカ『〈雅子さま〉はあなたと一緒に泣いている』(筑摩書房、2005年)、福田和也『美智子皇后と雅子妃』(文春新書、2005年)にも見られる。

17) 佐柄木俊郎「アイデンティティー危機にさらされる『平成皇室』」(『論座』57号、2000年1月)。

18) 雨宮処凛『生き地獄天国』(太田出版、2000年)、および、雨宮が主演した、土屋豊監督によるドキュメンタリー・ビデオ作品『新しい神様』(1999年)が、そうした精神動向を鮮やかに描いている。

この不安定さを体現しているのが、社会学者、宮台真司による、天皇をめぐる近年の議論である。宮台は原則としては、自分は「リベラリスト」であると語り、「自由な市民社会」の実現をあくまでも目指そうとする。しかし、人間が社会の中で「濃密な生」を確保し、ありふれた「意味」をこえた、「強度」を実感しながら生きるために、「ある種の宗教性」が必要であると、速水由紀子との対談『サイファ 覚醒せよ！——世界の新解読バイブル』（2000年）では、説くようになった。そして、そうした「宗教性」を担保するものとして、前近代の日本における「共同体的宗教存在」としての天皇を挙げるのである¹⁹⁾。

「私が世直しモードで活動する場合、『共生のルールに反する！』という物言いのあまりの手応えのなさに、つい『君側の奸を糾す！』という物言いのほうが、草の根領域を越える『正しさ』の感覚を惹起するには手っ取り早いのではないかとの誘惑に駆られる」と宮台が語るのは、天皇への意識が概して希薄な社会が逆説的に抱える、不気味な危険性を、そのまま表わしているように思える。たとえば、昭和の戦後初期、全国を巡幸する天皇を歓喜して迎えた日本国民に見られたような、皇室との豊かな親近感はや失なわれている。天皇をめぐる感情の、そうした安定した受け皿がなくなったために、かえって例外現象としては、天皇の神秘的な存在感に対する強烈な一体感を抱き、「君側の奸を糾す」行動が突発することもあるのではないか。

III. 新しい皇室論へ

しかし、1990年代には、天皇や皇室をめぐる、透徹した論考も、いくつか現われていた。その一つが、昭和天皇の病状悪化による「自粛」騒動のさなか、哲学者、久野収が週刊誌に寄稿した、『『天皇崇拜』の意識構造』（1988年10月）である。天皇の代替わりの前後に書かれたものということで、広い意味で、90年代の仕事に含めてもよいだろう。

この中で久野は、「人が祭りやイベントを自粛するから自分も自粛するという相互同調性の強さ」に、戦時中と同じ、「日本のナショナリズムの特色」を見る。だがその議論は、皇室の存在を批判してすませるのでなく、むしろ「象徴天皇制」を、日本社会の国際化のために活用することを提言して終わっている。

日本が自分を国際化させていくということは、とりもなおさず、日本が従来の一民族

19) 宮台真司『『天皇のモード』が輝くとき』（1999年初出、『援交から天皇へ——COMMENTARIES：1995-2002』、朝日文庫、2002年、所収、45～54頁）、宮台真司・速水由紀子『サイファ 覚醒せよ！——世界の新解読バイブル』（筑摩書房、2000年）54～63頁。

国家であることをやめ、外国人に門戸を開いて、多民族国家になっていくということにほかならない。外国人をただ、労働者として受け入れるだけでなく、受け入れる以上は、日本の国民がもっている権利と責任を同じように、その人々にもたせ、皆、平等に扱わなければならない。これまでのように、大和民族だけをえこひいきして、国内の在日中国、朝鮮人やアイヌの人々や沖縄の人を差別したりすることは、許されてはならない。／そして、もっとも大事なことは、多民族国家になったあかつきにも、天皇制を信じる表現、信じない表現の自由は等しく保証されなければならないということである。／天皇が大和民族国家のシンボルから多民族国家のシンボルへどのように生まれかわるか——これが、天皇をはじめわれわれ国民に課せられている最重要の課題であるように思う²⁰⁾。

しかし、この久野の発言は、90年代にはまた、事件を引き起こすことにもなった。1994（平成6）年2月、島根大学法文学部法学科が、この文章を含む三つの文章を引用して、入学試験の小論文問題に用い、「天皇の戦争責任を、今、問うことの意味」と、「象徴天皇制のあるべき方向性」についての考えを、受験生に論述させたのである。これに対して、翌月に『神社新報』の記事が「思想審査」と批判し、それ以後、6月にかけて、右翼団体の街宣車が島根大学におしよせ、文部省大学入試室が、島根大学学長に対して、「意見の大きく分かれる問題にもかかわらず、片方の主張に偏っていると非難されるような文章」を素材とするのは「配慮に欠けていた」と、電話で「注意」することにもなった²¹⁾。——天皇をめぐる意識は、あいまいに漂った状態であるのに、あるいはそのゆえにむしろ、暴力を背景にした社会のタブーが、1990年代を通過して、厳然と生き続けているのである。

20) 久野取『展望』（晶文社、1990年）230頁。なお、あとに見る入試問題事件のゆえか、この文章は、『久野取集』全5巻（岩波書店、1998年）には収録されていない。

21) 『朝日新聞』1994年5月23日、および、和仁廉夫『歴史教科書とナショナリズム——歪曲の系譜』（社会評論社、2001年）153～156頁。こうした「異質性を排除する力」が日本社会に遍在することを問題視し、その脱却のために「天皇及び皇室を私的存在に還元」することを唱える論考として、井上達夫「天皇制を問う視角——民主主義の限界とリベラリズム」（1992年初出、『現代の貧困』、岩波書店、2001年、所収）がある。